



エッセイ

子どもたちと一緒に外国で生活しながら感じた「孤独」

木村 祐子*

© 2018. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

1. アメリカでの生活が始まって

「今日、私、家族以外と話してないな…。日本語しか話してない。アメリカにいるはずなのに、なんだろう、この孤独感…。」

アメリカに来て3～4ヶ月頃まで、そんな風を感じる事が多々あった。外国で生活するのは初めてではない。学生の頃に1年間、日本語教師になってから2年間、それぞれ英語圏ではない国で生活したことがあった。そのどちらのときも、日々その国の人やことばに触れて生活し、戸惑うこともあったが新しい発見も多く、毎日がとても刺激的であった。現地のことばに触れる機会も多かったので、耳にすることばを辞書で引いては覚え、伝えたいことばを辞書で探しては使って、もちろん努力もしたが、現地のことばを自然と身につけていったように記憶している。

今回、夫の都合で1年間アメリカに行くことが決まったとき、過去の外国での生活の記憶がよみがえってきた。きっと刺激に満ちたわくわくした生活がまっているんだろうな。英語にコンプレックスを感じている私でも1年あれば、英語でのコミュニケーションが苦にならない程度に上達するんじゃないか。そんな妄想もしていた。

しかし、現実はそうではなかった。乳児を含む子どもたちを連れての外国生活は、単身で外国で生活していた時のものとは大きく異なった。アメリカにいながらほとんど英語を使う機会もなく、家族としかまともな会話をしていない日々、こんな状況のまま1年が過ぎてしまうのかという孤独と不安を日々抱えていた。

そんなときにふと思い出したのは、日本語教師として担当したあるコースの学習者たちだった。

* アメリカ在住 (Eメール: yuko_musa@yahoo.co.jp)

それはリーマンショックの後の不況により仕事を失った外国人労働者のための日本語クラスだった。学習者の中には十年以上日本で暮らしている人も少なくなく、日本語での日常会話にはさほど困らないような人もいたが、日本にいながらほとんど日本語を使わない生活をしてきたため、あまり日本語がわからないと言う人もいた。ある20年以上日本にいるという学習者が「どういたしまして」や「こんばんは」など、ごく日常的に耳にするであろうことばを、そのクラスで初めて聞いたと話してとても驚かされたのを今でもよく覚えている。しかしそれはそれほど驚くべきことではなかったのだ。外国で生活する誰にでも起こり得ることなのだ。アメリカで彼らのことを思い出しながら、私はそう強く感じていた。

2. 長女のアメリカでの生活とことばの学び

そんな私とは真逆の立場で、しかし同じように葛藤していたのは6歳の長女だっただろう。私たちがアメリカへ渡ったのは5月末だった。長女は日本で4月に小学校に上がり、1ヶ月ほど日本の小学校で過ごしたところでの「移動」だった。アメリカの学校は6月半ばに学校の年度が終了し9月から次の新年度が始まるため、9月まで学校に入れないのではないかと心配していたが、あと2週間ほどで今の年度は終了してしまうけれど、早く英語の環境に慣れた方が良いからとすぐ公立学校のKinderクラス（日本の幼稚園の年長に相当する）に通わせてもらうことができた。私たちが居住していた市の公立学校にはSEI（Sheltered English Immersion）プログラムという英語がわからない子どもたちを集めたクラスを設置した学校が幾つかあり、長女はそのSEIプログラムのKinderクラスに通うことになった。英語がわからない子どもたちのためのクラスではあったが、長女にとってはいきなり英語の環境に放り込まれる格好となった。

そして2週間をKinderで過ごし、そのまま夏休みに1ヶ月SEIプログラムのサマーキャンプ（キャンプとは言うが通級のサマーコースのようなもの）に通い、9月になってようやくアメリカの学校の1年生となった。長女にとっては住環境や言語環境だけでなく、日本の幼稚園→日本の小学校→アメリカの幼稚園→アメリカの小学校と教育段階も大きく変化した数カ月だった。

アメリカに来て半年、小学校に上がり3ヶ月ほど経つ頃になっても長女の英語はさほど上達しているようには見えなかった。宿題で毎日出されていた算数のプリントもその指示を読んで理解するのも一苦労だったし、お店や同じマンションの住人に簡単な英語で話しかけられてもほとんど返すことができなかった。アメリカで出会った子育て中の人からは半年もすれば何とかやり取りできるようになるよと言われていただけに、親として家庭でもっと何かすべきだったのではないかと不安になってきた。

そんな頃に学校の担任教師との個人面談があった。そこでの主な話題は長女がクラスで日本人の子どもとばかり「つるんで」いること、日本語で日本人の友だちと話しているときはとてもよく話すが、英語を使う場面ではほとんど話さないというものだった。「やっぱりそうか」という

のが正直な感想だった。スクールバスで通学していたが、バスを降りてからもよく同じバスの日本人仲間（学年は異なるが）と遊んでいたし、家に帰っても親や兄弟と日本語で話し、日本から持ってきた日本語の本やDVDを好んで見たりと、アメリカにいながら日本語を使う環境には事欠かなかった。このままだとあと半年してもあまり英語の上達は見込めないだろうと密かに思っていた。

せっかくアメリカにいて英語を学べる環境にいるのに英語を身につけずに日本に帰るのはもったいないという気持ちはもちろんあったが、1年で日本に帰ることが決まっていた我が家は、家では専ら「日本の学校に戻ってから困らないための勉強」をしていた。具体的には小学校1年生の漢字と短い文章読解のドリルを日課とすることであった。

そんな長女に変化が現れたのはそれから1,2ヶ月ほどしてからだろうか。それまで学校での話と言えば、体育や図工、音楽など英語がわからなくても参加しやすい実技教科の話題が多かったのが、英語がわからないと参加が難しいような学科の授業の内容についても学んだ内容について話してくるようになった。1月に入ったある日のこと、学校から帰ってくると「ママ、マーティン・ルーサー・キング Jr. って知ってる？」と唐突に質問してきた。そして、そのまま話し続けた。「今度のマンデーは学校がお休みでしょう。それは、マーティン・ルーサー・キング Jr. の日だからなの。アメリカには黒い人と白い人がいるけど、むかしは、ぜんぶ分かれてたの。学校も別々だったし、レストランとかも別々だったし、バスも黒い人はうしろにしか座っちゃだめだったの。ぜんぶ、ぜんぶ分かれてたの。でも、マーティン・ルーサー・キング Jr. は、それは良くないことだってスピーチしたり、みんなでマーチしたりして、変えたんだよ。ママ、知ってた？」休みなく説明する長女からは、学校で学んだキング牧師の話が彼女にとってはとても衝撃的で、それを私に伝えたくて仕方なかった様子が伝わってきた。学校で学んだ事をきちんと理解していないと語れない内容ただだけに、「あ、ちゃんと学校で教わっていることを理解できるようになってきているんだ」と安心した出来事でもあった。

会話の中に急に英語が混ざってくるようになったのも、英語の本を自分から積極的に読むようになったのもこの頃からである。この頃の変化には目覚ましいものがあった。徐々に英語ができるようになってきたというより、まさに英語が急に上達した、今までで少しずつ吸収してきた英語が一気にあふれたという感じだった。

理由はいろいろあるのだろうが、親として日本語教師として長女を観察した中で感じた大きな要因は二つ。一つは、文字が読めるようになったこと。アルファベットと音やつづりの関係を学び、英語が単語レベル、単文レベル、文章レベルと読めるようになった。耳からだけで学んでいた英語を、文字を通じて目からも学べるようになったことは、とても大きかったように感じる。つづりと読みのルールを学んでから日常生活で目にする英語をブツブツと読むようになった。それは看板の文字であったり広告であったりメニュー表であったりした。絵本を読む宿題も文字を読む練習にとっても役立った。小学校に上がってから算数のプリントの他に、毎日1冊学校から持ち帰った本を読むという宿題が出ていた。学校で小さいグループに分かれ先生のテーブルに呼

ばれ先生と一緒に本を読み、読んだ本を家に持ち帰り、家で音読して持ち帰るというものであった。初期のころは学校で習ったつづりと音のルールを単語レベルで確認するよい練習になったし、今は新しい単語や表現を身につけるのにとっても役立っている。初めは文字を追うので精いっぱいだったものが、すらすら読めるようになり、気に入ったフレーズを暗記し、内容を楽しめるまでになった。絵本の中では、ことばを繰り返し目で見て口に出して何度も楽しむことができるのが良いのだろう。テレビ番組に字幕を表示させる機能も長女のお気に入りだ。番組を耳で聞きながら字幕を追って、文字でも内容を確認できるからだ。「ママ、今〇〇って聞こえたんだけど、書いてあったのは違った。また出てくるかもしれないから、一緒に見てて。」なんて頼まれることも多々あった。

英語の上達に大きく関与したとを感じるもう一つの要因は、日本人以外に仲の良い友だちができたことである。それまでは個人面談で担任教師に指摘されたように日本語が通じる相手と遊ぶことが多かった。しかし英語が共通言語の仲の良い友だちができたことで、「ことばが通じるから一緒に遊ぶ友だち」から、趣味や興味が近い「一緒に遊びたいと思う友だち」と遊ぶようになった。「伝えたい、繋がりたい」という気持ちがコミュニケーションの手段としての英語と結びつき機能し始めたようだった。大好きな友だちともっと遊びたい、繋がりたいという思いは「ママ、今日G（友だちの名前）とアフタースクールに遊ぶ約束してきちゃったからね。あとはママたちで曜日とか時間とか決めちゃって。ちゃんと連絡してよ。今すぐ。ね、ね。」と行動に移す原動力にもなった。こうして実現したGちゃんとの放課後デートで、初めて生き生きと英語でコミュニケーションをとる長女の姿を目にした。人と繋がりたいという思いの偉大さを感じた瞬間だった。

3. 「繋がり」から広がる世界

長女の「人と繋がりたい」という思いがことばの上達に貢献したように、「人と繋がりたい」という思いは生きる上での活力にもなる。冒頭で「家族以外と話してないな…」と孤独感を語っていたように、私は当初、人との繋がりに飢えていた。乳児を連れての外出に心のハードルが上がりがなかなか外の世界との繋がりを持たずにいた。しかし、「図書館で小さい子供向けのプログラムがあるよ。」と知り合いから情報を得て、Sing Alongというみんなの手遊び歌を歌うプログラムに参加するようになった。すると、そこで知り合った人（多くの場合、日本人であるが）から、「今度、こんなイベントがあるよ」「ここにこんなグループがあるよ」「食材の宅配サービスがあるよ」などいろいろな情報を得たり、情報を交換したりするようになった。人との繋がりからいろいろな情報に繋がることのできた。その中で、図書館で無料の英語クラスがあることがわかった。子連れで参加させてもらえるか不安ではあったが行ってみたところ、子連れで参加することができた。無料の公開クラスなので、生徒は毎回入れ替わりがあるが、継続して参加している人

とは顔見知りになり、仲良くなり、よく話すようになった。英語で話す知り合いができると、「今度、こんなことを聞いてみよう。話してみよう。」と日々の生活のなかで話題を探したり、英語でどう表現したらいいのか考えたりするようになった。家族や日本人以外の人と繋がりを持つことで、私はアメリカで生活しているという実感を持つようになった。

一度、外の世界との繋がりを持つと、そこからたくさんの人や情報に繋がることできる。しかし、一番初めの繋がりを持つことがなんと難しいことか、今回それを身をもって経験した。日本で暮らす外国人の中にも、せっかくいろいろな情報があるのに、その情報に繋がることができずに孤立している人も少なくないのだろうと、外の世界との繋がりを持たずに孤立している人の存在に思いを馳せた。そして「情報弱者」である彼らが、彼らが必要とする、または、彼らにとって有益であろう情報にどう繋がることできるのか、またはどう繋げることできるのか考えずにはいられなくなった。アメリカでの生活は、子どもたちのことばの習得だけでなく「移動する子ども」と共にある家族の生活や思いについても考えるよい機会となった。